
本読み少女と偽りのストーリー

フウト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本読み少女と偽りのストーリー

【Nコード】

N1275T

【作者名】

フウト

【あらすじ】

世界はストーリーでできている。そういう捉え方を持つ職業があった。それが文筆師。彼らはそのストーリーを管理し、世界の均衡を保つ。だから予定調和にない変更は許されていなかった。

少女は本を読むことが好きだった。そして自らの運命が決められていることを知らなかった。

これから始まる物語は少女が自らの運命を受け入れ、立ち向かう物語だ。文筆師の少年と出会ったとき、彼女が何を思うのか。そこから全てが始まる。

1 - 1 アバンですか？

ほんとうの言葉をあたしは探していた。

嘘、偽りなんてどこにもない、まっさらで綺麗な言葉を。あたしの気持ちをそのまま伝えることのできる、間違いのない、正しい言葉。

世界中に無数にある本の中にそれはきつとあると信じていた。

あの日、あの時がくるまで

1 - 1

早水茉莉は図書委員だ。神坂高校は茉莉の通っている高校で、進学校として有名であり、クラスは各学年6クラスもあって、生徒の数は全体で千人を超えている。地域では一番大きな高校。その中にある図書館はいつもがらんとしている。進学校ともあれば本を読む生徒が多数いそうなものだが、茉莉が図書室で見かける生徒はいつも同じ顔ぶれだったうえに、本を読んでいる者は少なく、あいた時間をつぶすため雑誌を読みに来る生徒が多い。

茉莉はいつも図書館のカウンターにいた。授業中はさすがに司書がカウンターにいるが、昼休みや放課後になると茉莉はすぐに飛んできて、司書の仕事を奪うのだった。それは仕事熱心ということではなく、ただ単純に本が好きだからだ。

客の来ないカウンターは茉莉には居心地がいい。好きな本を読みゆったりと世界に浸る。たまに客が来れば対応し、たわいもない会話を楽しむ。彼女にとってそこは学校での唯一の居場所とも思っていた。

そんな本の虫である茉莉には友達がいなかった。友達の基準がわからないから判断ができない、とかいう個人思想に左右されているわけではなく、本当にいなかった。偽りなく心の底から笑いあえる仲

の知り合いが、今まで一切……

でも茉梨は孤独とは感じていない。本の中に散らばっている言葉が彼女の心を埋め満たしている。これが彼女に友達が出来ない理由。空想で満足しているから、現実には癒しを求めていない。だから他人に積極的に関わろうとしない。しかし避けることもしない。彼女にとって実在する人間は興味の対象から外れていた。

しかし不思議と茉梨はクラスメイトから冷たい眼で見られてはいなかった。むしろ彼らからは好かれていた。いつも本を読んでいて一人でいることを好む彼女。でも話しかけると気さくに返答してくれる。成績も悪くなく、周囲に合わせて行動もできる。それに彼女は容姿が良かった。小さい体に、凜とした顔つき、一目見て嫌悪を感じる者はなく、好意をもって接する者が多かった。

誰からも愛されているが、誰も愛さない。

それが茉梨の本質だった。彼女自身も気が付いていないような。カレンダーが夏休みの始まりを教えてくれるようになったある日、茉梨はいつものように図書室に向かっていた。午前の授業が終わって、いつも誘ってくる女子と一緒に弁当を食べると、食後の会話を楽しむこともなくその場を去る。彼女は図書館で弁当を食べただけだった。でも規則上できないからしかたなく教室で食べているだけだ。

図書室に入ると、カウンターにいる司書に挨拶をする。いつものことなので司書は挨拶を返すと、そのまま奥の部屋に行く。茉梨はシフト交代のようにカウンターに入り、そつと姿勢よく椅子に腰かける。そして持ってきた鞆の中にある読みかけの本を取り出すのが普段のルーチンだった、のだが彼女は異常に気がつき手を止めた。見かけない人物がいた。ぱつと見て体格から年が近いことは分かったが、制服を着ていなかったので生徒とは思えない。黒い服を身にまとっていて、退屈そうに本棚を眺めている。不思議と茉梨は視線を奪われる。

しばらく眺めていたら、彼は茉梨に気がついた。彼女は見ていた行為が見られたことを恥ずかしく思い、鞆の中から素早く本を取り

出し冷静さを保とうとした。

物語の中に意識を落とす。そうすればさっきの事も静寂にまぎれて消え去ってしまうはずだから。しかし彼女は現実から離れられなかった。さきほどの彼がカウンターに近付いて来た。

まず足元が見え、次第に茉梨は視線を上を動かし、彼の顔を見た。黒ぶちの眼鏡をかけていて、優しそうな表情をしていた。

「なっ、なにか用ですか……」

茉梨は声が震えていた。そのことに彼女自身が驚く。

彼は茉梨の眼をまっすぐ見つめる。そして澄んだ声で言う。本の中に書かれている空想ではなく、これから始まる彼らが描き紡ぐあげる物語の冒頭を。

「きみは死んでしまう」

そうして彼女と彼は出会った。

1 - 1 アバンですか？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

物語はこれからなので、また来てくれたらうれしいです。

日曜日の更新を目指してます（<|>）

1 - 2 中二病ってやつですか？

「それって、ナンパってやつですか？」

出会ったばかりの人に死ぬと言われる経験はなかなか無い。もちろん茉莉にとつても初めての事で、どのように対処すればいいのか分からない。ただ誘い文句に聞こえたので、ナンパの類だと彼女は考える。

男はあからさまに悩ましく頭に手を当てた。

「……そう返されるとは、この俺でも予想外だ」

「違うんですか？」

「もちろん。ナンパだったら、言葉のチョイスを疑うね」

「そうですね、見事にスベってましたし」

「だから……」

はあ、と男はため息を吐きながらずれた眼鏡を元の位置に戻す。

そのとき茉莉は男の肩に掛っているショルダーバッグに分厚く黒い本と真っ白い太い筆が入っているのが見えた。

「もしかして」と彼女は閃く。

「小説家さんですか？ もしくは小説家志望とか」

「小説家？」

茉莉はショルダーバッグを指差す。ああ、と男は納得する。

「残念ながらその推理は外れ……ってわけでもないな。ニヤピンだ、うん惜しい」

この世界には小説家という奇怪な職業に対して、近いけど違うものってあるのだろうか。例えば文章を書くことが共通しているなら雑誌のライターとか新聞記者とか、確かにあるといえはあるが、黒ずくめの怪しい男がその部類とは茉莉には思えない。

その謎の人物は本を取り出す。

「廻りくどいのが嫌いだ。だから、ありのままに説明する」

闇に浸食された本がカウンターに置かれた。鈍い音からその重量

がうかがえる。

「俺は文筆師で、この本が現夢本」

実に簡潔で、あまりにも説明を省き過ぎていた。だから数多くの物語に触れている彼女をもってしても、この言葉の意味を解釈することは難しかった。

「中二病ってやつですか？」

文筆師に現夢本、そんな胡散臭い名前を二つも真面目な顔で言われると、妄想が過ぎると誰でも思うだろう。だから彼女はクラスで女子がよく、虚言癖のある男子に向かって言う単語を口に出した。意味はよく変わっていないが、その部類の人種を指す言葉であることはなんとなく想像できていた。

「キミは、天然なのか」と男が茉梨にあきれかけたとき、急に顔が曇りだした。口元をぎゅゅと閉じると、低い声になり、瞳孔がぎゅゅと広がる。

「いま何時だ」

「時計ならあそこに掛けてますけど……」

男は茉梨の親切を無視し、思い出したように慌てて腰に付けている懐中時計を開く。それは時を刻んでいた。歴史を身にまとうていた。外観は鈍く黒ずんでいるが、元は綺麗に黄金に輝いていたことが茉梨には容易に想像できた。

さびしそくに文字盤を見つめると、男は蓋をそつと閉じる。

「時間がない」

男は茉梨が聞き取れる最低の音量で呟く。それに対し彼女は軽く返す。

「いったい何の？」

二人の間に温度差があるのか、茉梨はレンズの奥にあった彼の瞳に驚く。可笑しな話をしているのにそれは真剣で、引きつける魅力があった。

「きみが死ぬまでの時間だ」

「あたしが……」

「俺と一緒にくるんだ」

手が差し出される。異様に白くて美しい手が。人形のように繊細な部品が。彼女を導くように、そのストーリーから逃れさせるように。

彼女は目を逸らし、悩むことなく答える。

「本を読みます」

あきれていた。茉莉はどうして今日はここに来てしまったんだろうかと思った。大好きな場所で、学校にいるときは常にここにいたけれど、この瞬間ばかりはさっさと教室に戻りたかった。やっぱり昼ご飯を食べた後、クラスの女子と一緒に無駄話に花を咲かせればよかったんだと、彼女は少し後悔したがすぐに頭を切り替える。

曲げるわけにはいかない。自分のライフスタイルを。昼休みはここで本を読むということ。

「俺の話をちゃんと聞いていた？」

「ええ、しっかり聞いてましたよ」

ページめくる。

「だったら一緒に逃げようよ」

「嫌です」

ページめくる。

「なんで、生きたくないのか」

「生きたいです！ 本を読みたいです！」

大きな声を出したため、視線が彼女に集まったが気にせず本を読む。

男はその茉莉の本に対する情熱を見て、あきれて頭を押さえた。

「だったらさ、謝ればいい」

「謝る……どうして」

ページめくる。

「理由なんてどうでもいいんだよ。きみが謝ったら俺は消える。だから謝れ」

「……それ本当ですね。本当なんです」

理解は出来ないが謝るだけでこの茶番劇が終わるなら……

茉梨は間髪入れずに軽く腰を曲げる。

「よくわかんないけど、ごめんなさい」

これでやっと平和になる。いつもの静かな図書館に戻る。茉梨は心の中で安堵した。だが、男はまだ満足しないのかさらなる要求をしかけてくる。

「もっと机にこすりつけるぐらい、頭を下げる」

さすがの茉梨も男の横暴に頭の血管が切れそうになったが、ここはぐっと怒りを呑み込み堪える。極限にめんどくさい人間と決別するため、と自分に言い聞かせる。

「すみませんでした！」

納得出来ないためか思わず声を荒げたが、頭を机にぶつける寸前まで勢いよく下げた。

「じゅうぶんだ」

男のその言葉に対し、何が、と心の中で反論したとき、後ろからけたたましい足音が聞こえた。そして背中に何かがぶつかった衝撃が走ると、カウンターの向こう側の床にドスンと何かが落ちた。

恐る恐る茉梨は顔を上げる。すると例の男は佇んで、床に倒れている人を見下ろしていた。それは司書だった。白目をむき、口からは泡を吹いていて、痙攣しているのか筋肉が微細に動いている。いつもの笑顔はそこになかった。

茉梨は思わず口を覆う。

「なに、これ……」

状況が理解出来ず、助けを乞うように男を見れば、右手にきらりと光るナイフがあった。

男は黙って立っている。

1 - 2 中二病ってやつですか？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

幼稚な文章力なのですが、一生懸命書いてます。

だから暖かい目で見てくださいたらうれしいです。

次回も頑張ります。

1 - 3 そんなの無理ですよ

日常と非日常という二つの言葉がある。日常が普段行っている事柄を指すならば、非日常はふと起こった事を指す。奇怪で、予想もしえない物事がそれにあたるのだろう。考えたくも、見たくもない、不気味な出来事が。

では茉梨の身に起こったことは何だったのか。日常、非日常。それを分類するのは簡単そうで難しい。先入観が判断を邪魔する。自分の身に置き換え考えれば非日常なのかもしれない。だからといって茉梨にとつても同じとは限らない。言葉は絶対的に決まった意味を持つのではなく、常に相対的である。

実にやっかいな道具だ。

「なんで、なんで司書さんが倒れているの……何をしたの……」

茉梨の背筋に寒気が走った。男の手に持つナイフを見た瞬間、さっきまで話していた相手が恐ろしい存在に思えた。優しそうなマスクを被っていて、剥がせば怪物が顔を覗かせる。想像で恐怖を増幅しながら、彼女はふと男の言葉を思い出す。

あたし、死んでしまう

茉梨は先程の会話の意味を唐突に理解した。あれは占いでも忠告でもない。これから男が起こす行動を事前に宣言した犯行予告だったと。平気な顔をし、恐怖を確かめ楽しむ。正気の沙汰ではない、化け物がそこにいた。

武器になるものはないのかと、彼女はバックを探る。生きるために、この場を乗り切るために、戦わなければいけない。冷静だからそう判断できた。

「わかっただろ、これで俺がナンパでも妄想でもなくて、本当の事を言っていたって」

何事もなかったみたいに、男は親しみを込めて茉梨に話しかける。いったい相手が何を考えているか、彼女には読みとれない。だが関

係ない。時間を稼ぎ、チャンスを探う。そのために会話をする。それしかなかった。

「そうみたいです。すつごく、くだらない男だっけわかりました」
男は啞然とする。

「きみ、この状況でなにをまた」

「この状況だからこそです。あなたは意味不明な単語を並べて、あたしが死ぬと予言しました。けどなんですかこの光景。あたしが死ぬどころか、司書さんが倒れているじゃありませんか。荒唐無稽、理解不能、意外な展開で読者を楽しませようとして、空回りしている小説家ですかあなたは」

目で男の視線を捉えながら、感覚のみで茉梨はバックを探る。

「だいたい人の未来なんて見えるわけがないですよ。ほらよくテレビで偉そうに喋っている占い師とかいるじゃないですか。あれっでいかにも未来を見えているふりをしている、ただの喋り上手ですよ。一般的に当てはまる曖昧なことを述べて、占われている方は間に受けて自然と情報をもらす。それを聞いた占い師は簡単に想像して、また一般的に当てはまることをいう。ばかですよ、少し考えればわかることなのに騙されるなんて」

一息。手に硬い物があたる。

「もしかして人って騙されることに快感を覚えているかも。例えばですよ、手品って騙されてすつきりする娯楽じゃないですか。手を握るだけでコインなんて消えるわけがないのに、選んだカードが読心術で当てられるわけがないのに。構造は単純なんです。種を見抜けない人って、それが出来ないってことを考えてないんです。この人ならコインを消せる、この人なら心を読む。なんて物理法則を無視できる神様のような人物を勝手に想像して作り上げるんです。手品ってある種自己暗示なんです」

茉梨はバックの中に入っていた清涼剤を掴み、タイミングを計る。あまり効果はないかもしれないが、清涼剤を顔にかければ目くらましになると彼女は考えた。

「あなたってもしかして物語にハマるタイプじゃないですか？たとえばヒーローもののアニメを見た後は自分が世界を救えるって思い込んだり、どん底から這い上がるサクセスストーリーのドラマのあとは自分もビックになれるとか勘違いしたり。そうあなたって自己暗示が強いんですよ。だからそんな全身黒づくめの奇妙な格好をしているんです。外見から入り込むタイプなんですね。雰囲気さえ掴めば、自分の創りだした文筆師って設定が本当にあるように思えてくる。黒く分厚い本を持ち歩けば、現夢本という空想を通して自分に能力があるように錯覚できる。まるで小学生のやる一人遊びなんです。あつ、でも中二病って言葉もあるのだから中学生って可能性もありますね」

「あたしが死ぬっていうのもその妄想の設定の一つなんですよ。たぶんあなたって狂気にかかっているんですよ。人を殺したいんですよ。だから自分の創りだした設定をもっとも活かす方法を考え、なおかつ主人公気分を味わいながら、その異常な性欲をみたすためにここに忍び込んだ。そして次の展開を考えているときにあたしが偶然ここにやってきた。つまりあたしって不運なんです。勝手にあなたの一人劇に巻き込まれ、殺されようとしている。現実って小説よりも奇なりってよく言われていますし、たぶんどうしようもないんでしょうね。これがあたしの人生だと諦めるのも、一つの手かもしれません。それでもあたしは最後まで生きたくて、まだまだ本を読みたくて、人生に満足してないんです。だからあたしは、あたしは――」

男は指先で眼鏡を押さえ、一言呟く。

「現実を受けとめる」

茉莉は手から力が抜け、床にスプレー缶を落とす。まくしたてて喋ったためか、びっしょりと汗をかいていた。口を閉じ、周りを冷静に見渡す。

泡を吹いている司書の右手はありえない方向に曲がっており、顔は紅潮し、いまだ痙攣している。飛び出そうになった眼球は茉莉を

凝視し、意味不明な奇声を発している。

それは人でなかった、人形でもなかった。

異様な生き物がそこに横たわっていた。知性の欠片も無い、肉が集まってできた物体が。そんな光景が広がっているのに、図書館にいる他の生徒は見向きもしない。それどころか気づいてもいないように、日常を謳歌している。

これは茉梨にとっての非日常。触れるべきではない世界。

視界は震え、世界は濁る。

存在は曖昧になり、疑問は明確になる。

そこに広がる光景は元には戻らず、変化は彼女を蝕むように事実を突きつける。

彼女の瞳にうつすらと影はかかり、冷たい幻が頬をさする。

「そんなの、無理ですよ……」

状況を理解し発したその言葉は、震え、虚無にむなしく響く。

失った日常は二度と戻りはしない。

1 - 3 そんなの無理ですよ(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

次回から物語が動き出しそうです。

また来ていただいたらうれしいです。

1 - 4 あなたは何を書いたんですか

男は馴れているのか、淡々としている。

「……当然の反応か。きみはさっきまで世界の表面しか見ていなかったんだ、戸惑うのも仕方ない。だけど不安がる必要もない。この俺がいるんだから」

その言葉は茉梨には届いていない。彼女は不安の渦の中を漂っているからだ。辿り着く場所も、流れゆく場所もわからぬ、大海原。地囃も方位磁石もない、彼女はただ情報が欲しかった。そして理解しなかった。この状況を、自分の行く末を。

「だったら、どうするんですか……司書さんは、どうなるんですか？」

「他人の心配、しかもきみを殺そうとした男の心配をするなんて、お人よしだな」

「あたしを殺そうとした……」
背中に感触が蘇る。

頭を下げた瞬間に当たった、あれはやっぱり……

茉梨は目の前に転がる司書を見る。そして思考し直した。先程の状況を。

男の言っていた「死んでしまう」という言葉は、その通りに茉梨が死ぬことを予見していた。それも司書に殺されてしまうことだ。だが彼は回避させた。ちょっとした誘導で、彼女のストーリーを変革させた。司書のナイフは茉梨の頭上を通りぬけ、体勢をくずしたとき、男がその力を利用して司書を投げ飛ばした。その際に司書の手を持っていたナイフは飛び、それを男が拾い上げたということだ。この推理、というか事実は筋が通ってはいるが、奇妙は点が残る。それは

「どうして司書さんはあたしを殺そうとしたんですか、それにナイフを頭めがけて突進してきたんですか」

眼鏡の奥で男はにやりと笑う。

「案外、冷静だったか。動機について知りはないが、ナイフの件、それには心当たりがある。彼は操られていたんだ、文筆師に」

茉莉はごくりと、唾を飲み込んだ。

文筆師、その言葉をさつきまでバカにしていたが、今は違う。非日常に取り込まれた彼女にとって、文筆師は実際にある言葉となっていた。そうでないと説明出来ない気がしたからだ。

男はカウンターに置いてあった本を取り上げる。その代わりにナイフを置く。

「この現夢本、これにストーリーを書き込めばある程度具現化される。例えば、早水茉莉の頭にナイフを刺す、なんて書き込めばそれ起きてしまう」

現夢本をぱらぱらとめくる。

「例えば、早水茉莉を生かす、なんて書き込めばそれも実現させられる。それなりの力があれば、だけどな」

「あなたは」

ぱらぱらとページはめくり、めくる。

「あなたは何を書いたんですか」

そしていつしかページは無くなり、閉じられる。

「さあ、どっちだろうな」

意地悪そうに男はほほ笑む。

茉莉にはなんとなく感じ取れた。この男は後者を書きこんだに違いない。直感がそう告げていた。悪い人じゃない。でもいい人でもない。ただ人を殺すようには思えなかった。会って間もないのに、そうとしか考えられなかった。

心は疼き、思考を諭す。残してきた足跡の上に、回路が紡ぎあげられる。

それが人生。

茉莉には漂っている海の座標が見えてきた気がした。だが同時に恐ろしい事実気づくこととしている。嵐が近付いて来ている、そん

な予感。

「どつちって、もしかして別にもう一人いるってことなんですか。文筆師が」

そう男が茉莉を生かそうとしたならば、殺そうとした人間もいるはずだ。それは司書ではない。彼は操られていた、誰かに、その黒幕に。

茉莉の背筋に寒気が走った。何かが始まる。感じとった。新しい本のページをめくる音を。そこにストーリーが描かれていることを。男は本を左手に、筆を右手に持ち、構えた。

「そこにいるんだろ、ストーリーテラー」
ビリビリと空気中に電撃が広がる。

1 - 4 あなたは何を書いたんですか（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回は新キャラが出る予定です。

また来ていただいたらうれしいです。

1 - 5 しごのせかい

茉梨の背後から声が聞こえた。

「想像するのはカンタン、だけど断言するのはディフィカルトウ。

それが世界のストールウェイ」

陽気な声色で、テンポに乗っている。

彼女が振り返れば、白地のコートに様々な色の幾何学模様を描いた人間がいた。声からは男か女は判別できず、白塗りの顔に黒い線を入れた妙な化粧をしている。

正体不明の怪人がいた。

恐怖で茉梨は立ち上がり、思わずカウンターに後ろ手をついてのけぞる。

怪人はどこからともなく白いカップを取り出し、漆黒の液体をそっと口に含んだ。

「ボルドウ」

うまいのか、至福そうな表情をする。

すでに混乱していた茉梨にとって、状況は悪化するばかりである。「それって、コーヒーですか」

人はたまに聞かなくてもいいことを尋ねてしまう。それは会話の間を埋めるための無理やりな話題作りであったりする。だがこの場合、彼女の防衛本能が働いた。適当な話題を振ることで怪人の意識をそらすと。

だが行動が悪く働くこともある。

幸福から一変、怪人は不機嫌そうになる。

「コーヒーですと、あの苦々しく、苦々しく、苦々しくでしかない、汚水同然の液体。そんなものと一緒ですとお」

コートの中から一瞬で新しいカップを取り出し、茉梨に渡す。

白い井戸の中に、暗黒の世界が広がっているようだ。黒き闇から見えぬ手が伸び、彼女にそっと触れる。誘導されて、その液体を飲

み込む。怯えることも、躊躇することも忘れて。ぴりぴりと舌の上に刺激が走った。まるで電流のような、そんな感覚が。

「甘い、これってコーラ……」

「ブラボオー、そうこの世で最も高貴で美しい飲み物、コールアがワタクシの唯一無二の嗜好品、アンドウ体中を流れる血であるザエル」

怪人はぬつと、不気味な顔を近づける。その迫力に押され茉梨はカップを床に落とした。

ガラスのように脆く、砕ける。床に混沌が漂う。

「デイザリア！ それはそうと、どうです？ 死後の世界は」

「しこのせかい」

目はぶるぶると震え、焦点は合わない。ぼやけた世界に彼女は連れ込まれる。

「そう、本来のストールウイならば貴方はとくに死んでいる。デイザリア！ つまり、ここにいる貴方は死人も同然。そうゾンビイなの、ゾンビイ」

怪人は顔をぐちゃりと崩す。

「いやああああ」

茉梨は声を挙げながら、カウンターを飛び越え、男にすがりついた。少なくとも怪人よりも彼の方が安全だと咄嗟に考えたからだ。袖をひっぱり、怪人を指差す。

「なつ、なんなのですか！ あれは！」

「ストーリーテラーだ。あいつが司書を操っていた」

「じゃ、じゃあ、あの人があたしを殺そうと」

「デイザリア！ 誤解ですわ」

ストーリーテラーは深々と頭を下げる。

「ワタクシはただ本来のストールウイに戻そうとしたまで。そこにいるボウヤ。彼が書き換えた偽物のストールウイを、本物のストールウイに。」

腰を曲げたまま、顔だけ上げニヤリと笑う。

「それってどういうこと」

茉莉は混乱している。正しいとか、偽りとか、彼女には分からない。だから男に答えを求めた。だが質問に応答せず、男はストーリーテラーを睨みつける。

「お前こそ偽りのストーリーを書いてるんじゃないのか」

その言葉を聞き、ストーリーテラーの唇がにやりとつり上がる。

1・5 しごのせかい（後書き）

読んでいただきありがとうございます

1 - 6 戦いの始まり

「デイザイア、このワタクシがストールウイの書き換えを……」
空气中にある感覚が走る。それは茉梨が先程飲んだ、あの飲物に似た。

「ボウヤ、相手を考えてコトバを発しているんでしょね。このワタクシ、電撃のストーリーテラー”アノード”だと理解して」

両手を宙に広げた突端、左右の手の間に青い光が発生した。意思を持っているのか、蛇みたいにうねうねとそれは動く。

「ボルドウウウウ！」

アノードが低い声色で空気を揺らす。それに同調するかのごとく、その光 電撃は四方八方に散らばり、獲物を殺す矢のごとく飛んでくる。

句点電撃 物語を強制終了させる、ストーリーテラーの力。

生きた電撃は天井に備えられていたいくつかの照明を壊し、その膨大な電圧により、本を焦がし発火させる。生まれおちた小さな火種は、その餌である紙を食い散らし、活動範囲を広める。ほんの短時間で火の手は彼らを囲もうとしていた。

だが不思議なことに電撃は目標となるはずの彼らには向かわなかった。それはつまり、アノードは電撃を操っていると読み取れる。

「火が、本が、燃えてる、燃えてますよ！」

首をキョロキョロ動かしながら、茉梨は男の袖を強く引っ張る。早く図書館から逃げ出さなければ本ごと燃やされてしまう。だが、その炎という畏怖に男はまったく動揺しない。それどころか、先ほどよりも鋭い眼つきでアノードから視線をそらさない。

覚悟。その二文字が男の中に浮かび上がっている。

「ねえ、早く逃げよう、逃げないと」

「……俺は戦う」

「戦うって、どうして」

筆を持つ手に力が入る。

「お前を助けるためだ」

「あたしを……」

実は彼らにはすでに逃げ場はなかった。アノートがストーリーテラーであるかぎり、彼の管轄内にいるときはいつでも殺せる。それこそ赤子の手を捻るように。

だから戦わなければいけない。攻撃こそが最大の防御、それがこの場の理なのだ。

アノートはカップ片手にカウンターに座る。

「デザインア！ 少々感情的になってしまいました。ワタクシこれでも自分の仕事に誇りをもってましてねえ、だから侮辱でもされれば、そう、流れちゃうんですわ。刺激的なアンペアが」

優雅にコーラを飲む。

「そういえば、先程本を使いませんでしたわね。どうして？ 電流が貴方達に流れないとは限りませんのに」

「……直感だ」

「ほお、なるほどお」

アノートは舐めまわすように男を目探りする。

「どうやらただの文読師ではないようですね。直感 ストール
ウイを無視したオカルト的感觉。それをあの場面で信じられる文筆師がいるとは……アンペアが抑えきれないイイイイ！」

コーラを一気飲みし、口角からこぼれたそれをゆっくりと袖で拭く。

「久しぶりのパーティー。どちらがメインディッシュになるか、
ストールイイにも書かれてノッキング！ さあて、楽しい宴の開幕
へ……といきたい所ですが、ワタクシまだ貴方の名前を窺っており
ませんでしたわ」

アノートは胸に手を当て、深々と頭を下げる。

「青堂來だ」

來は間をおくことなく答えた。

「ほほお、あの青堂家ですか、どうりで……しかし、理解出来ませんわ。貴方ほどの輩がどうしてこんな小娘を」
そのとき悲鳴が響いた。

茉莉が怯えた様子である一点を指差している。

「しっ、司書さんが、燃えてます」

床に転がっていた司書、だった物に火が飛び移っていた。その熱さからか、声にならぬ音を発しながらバタバタとのたうち回っている。

アノートはカウンターに置かれていたナイフを手に取った。

「彼はとんでもないクズでした。血迷って少女を殺す、それが最後の仕事でした。そして罪を問われる前に自ら命を絶つ、そんな低能でした。だが、これもストールウイ！ ワタクシどもが干渉していいわけが……ノッキングなのですわ」

ペロリと舌を器用に使い、ナイフの側面を舐める。

「司書さんが……クズなわけありません」

その声は響き渡り、アノートは不意を突かれたように目を見開き茉莉を捉えた。

珍しく大きな声を出したためか、血が顔に昇り頬がほんのりと赤く染まっている。

「司書さんは、司書さんは立派な人でした」

瞳が少し潤んでいる。

「はぁ？ 貴方は殺されかけたのになにを」

「それは、アノートさんが操っていたからじゃないですか」

「ワタクシがこいつを……」

可笑しかったのか笑みがこぼれた。

「だからさつき誤解だつて言ったじゃない。ワタクシはストールウイテイラーなの。殺人鬼でも、偽善者でもないわ。あくまで傍観者で、このストールウイを管理するだけ。すなわち、貴方を殺す動機も義理もないザエル」

「でも、司書さんは」

「そう貴方に足りないのは経験、そして知識よ。しょせん司書だからなんだかノツシングだけど、そのゴミクズはそういう男だったってわけ。簡単に言えばヘンタイなのよ」

「そんなわけない。司書さんは優しく暖かい人だったもん」

「もん、じゃないわ！ デイザイア！ 貴方その男のストールウイをどれほど知っているのよ。どうせ0・1%も知らんでしょ、0・1%！ 知ったかぶってんじゃないわよ、小娘が」

「……あなたよりは知ってる。あたし、あなたより司書さんのこと知っている。なのにあたしよりも詳しいつもりにならないで」

必死に訴えた。彼女の心の声で。だが、それは意味のないことだからアノートには届く以前の問題で、関係のない言葉だった。

「ワタクシ思うの。貴方がどんなに綺麗な言葉を述べたところで、助ける力がなければ何も変わらないって。ほら現に貴方は燃えて苦しんでいる男を前にして、なんの行動もしない。ただ一人勝手に憐れんでいるだけ。それを世間では自己満足って言うそうよ」

茉莉の司書に対する気持ち、庇うような、憐れむような、それは全て自己満足にすぎない。死にゆく彼を前にして、彼女は行動をしない。来にすぎりついてこの状況を乗り切ることだけを考えている。誰からも愛されているが、誰も愛さない。

だから司書から殺されるほど愛されていても、助けるほど愛していない。

その茉莉の本質はゆるぎなく変わろうとしない。この生死の境でも。

「そんな、あたし」

「まったくパーティーを始める前に、一つ余興を見せまショウ」手に持っていたナイフを司書の後頭部に向けて放つ。

的確に目標に当たり、突きささる。暴れていた司書は糸の切れた人形のように止まる。すると魂を食らうように炎が強くなった。そして放つ。人形とは違い、奇妙な匂い、肉の焦げる独特な匂いを。

「うっ」

茉莉は鼻を手で塞ぐが、それは強烈に嗅覚を襲う。初めて嗅いだそれを拒絶するのか、彼女の胃は昼ご飯を戻そうと絞られる。吐き気を必死に抑え込む。

「デイザイア！ すぐに処理は終わらせるわ」

來が持っているような黒い本をアノートも取り出し、華麗に指先で文字を書き込む。すると空气中を占拠しようとしていた例の匂いは消え、燃えていた物体も姿を無くした。

司書という存在が幻だったように、そこには跡形はない。
「嘘……」

彼女は文読師がいる、その世界を覗いてしまった。

既存の常識なんて通用しない。

「さあて、始めようかしら。この愉快的なパーティーを」
アノートが広げた手の間を、雷のような電流が発生する。

1 - 7 幕は開けた

決戦を前に、図書館にいた生徒達がぞろぞろと出ていく。あくまで彼らには一切干渉せず、魂の抜けたような表情を浮かべて。

「フィールドはこの部屋全体。逃げ出すことも、また外部からの乱入も不可能。閉鎖されたこの空間で生き残った者のみが、生還することができる。……ディザイア、生の欲望に駆られ、他者に死をプレゼントウ。ああ、ぞくぞくするわ、このアンペア、抑えることインポッシビリティイイイ！」

その瞬間、電撃が二人に襲いかかる。その息の根を焼き焦がすために、恒久なる刺激を与えるために。

「きゃあ」

逃げ出すことを忘れ、咄嗟の反応で茉梨は頭を手で隠す。電撃を前にそんな行動なんの役にも立たないが、不思議なことに彼女は無傷だった。強く閉じた瞳を徐々に溶かせば、そこにものすごい速さで本に文字を書き込んでいる來がいた。

「早く逃げろ」

手を休めることなく彼は叫ぶ。

現夢本に文筆師しか理解できない速記文字を書き込み、電撃が襲いかかるのを防いでいる。

ストーリーテラー、その甚大な力に対処するには、彼も特別な力を使わなければならない。それが現夢本を使った、ストーリーへの介入。ここで述べるストーリーは本に書かれている小説のような物語のことではない。世界を構築するそのもの事。時間軸にそって発生する出来ごとの事。つまり文読師とは神なる力を授かった、異能者だ。

電撃を到着する前にうち消す。それを来は考えるよりも手を動かすしこなす。

「さてえ、そのシールドオはいつまでも耐えますかねえ。あは、ア

ハハハハハハ。このアンペアそう簡単に底つきませんわ」

バチバチと空気が切り裂く音が響く中、愉快そうなアノートの笑い声が断片的に茉梨には聞こえた。

余裕　アノートは確実に来より強靱な力を持っている。文字を書き必死に防御する来に対して、アノートは手を広げ電流を流せば言いだけ。無駄口をたたく余裕が十分にある。

戦って勝てるはずなんてない。

茉梨はそう考えると、図書館の出入り口に向かって走った。逃げるために、生き延びるために。だが、扉に手をかければ鉄のように動かず、外に出れない。

「無駄、ムダア、ここは閉鎖されてるって、言ったでしょうがあああ」

茉梨は奇妙な音に反応し振り返った。そこに蛇がいた。青く不気味に光輝く蛇が、あんぐりと口を開き、茉梨を飲み込もうとしていた。鋭き眼光に捉えられた彼女は蛙のように動きが止まる。

死んじやう

蛇は恐ろしいほど早く、茉梨に目を閉じる暇さえ与えなかった。

視界の全てに青が広がり、その神々しいまでのエネルギーに一つの魂が浄化されようとしたとき、蛇は見えない壁に衝突し、体がばらばらに空中に溶けた。

「こつちだ」

手を掴まれた茉梨は、引つ張られるがまま走りだす。炎の広がる本棚に向かって彼らは一心に走る。電撃が後ろから迫って来るが見えない壁に一つ、二つと遮られ消えていく。

「シールドをいくつか仕掛けたがそうはもたない。隠れてチャンスを待つ」

ある本棚の間に彼らは身を隠した。その直後、先程まで走っていた通路に光線が走りぬける。

茉梨を掴んでいた來の手はそつと離れる。

「どうするんです、これから」

「さあて、どうしようか」

閉じていた本を広げ、來は本棚に身を寄せて様子を窺う。

1 - 8 アノートの疑心

アノートはこの出来過ぎた展開に疑念を抱いていた。

東日本支部第9地域担当「電撃のストーリーテラー、アノート」その名は一部の文筆師の間では絶対的存在として恐れられているが、実際は上司のいる中間職だ。そのため上から伝わる命令には逆らえないし、そのストーリー通りに事を運ばなければならない。

それは正義のため、アノートはそう心の中で呟きながら仕事をこなしていた。

しかし、今回の命令、これは少し妙なストーリーだった。本来だったら死ぬはずだった少女が生きただけ、予定通りに死なせてあげるストーリー。しかも、少女を殺す際にはとある文筆師との一戦がある。

腑に落ちない。

運命が変わることなんて実際にはよくあることで、それを全て修正していたら、とてもじゃないけど文筆師全員がかりでも追いつけない。バタフライ効果といって、ほんの些細なイレギュラーが発生しただけで、運命なんてサイコロの目のようにコロコロ変わる。

そんな運命変更多発の中、この少女の運命だけを本来のストーリー通りに修正するなんて、ストーリーテラーの仕事として不可解極まりないのだ。しかも、対決する文筆師が静堂家の異端児と来たら、さすがに上からの直属の命令だとしても疑問の念が消えなかった。

「お前こそ偽りのストーリーを書いてるんじゃないのか」

青堂來の言葉が心の淀みに溜まる。

継承せずにレベル3にまで達した男の言葉だけに、それは真を得ているかもしれないとアノートは唾を飲みながら思考する。自らの疑念に水を与えるようなその言葉が、忠義を誓った組織に反骨する

ような推理に発展したことに畏怖を感じた。

まさか、あの方が偽りのストールウイをワタクシに命じるわけが……

ぶんぶんと頭を振って疑念をなぎはらう。

疑いこそ組織の破たん。正義の破綻。忠義を貫きとおす信念が、世界に真のストールウイをもたらす。

そこに自分があることを再確認し、アノートは空中に浮かせた拳を広げる。電撃で導く、正しき世界へ。そのために躊躇する必要などない。

電撃のストーリーテラー

誰もが認める圧倒的力で、この空間を彼は支配する。

1 - 9 フランケンシュタイン

「フランケンシュタイン」

茉梨は懐かしそうに単語を転がした。

彼らが逃げ込んだ本棚は西洋文学のコーナーだった。そのため彼女の瞳にその単語がふと飛び込んできた。

「あの人って、フランケンシュタインなんですか？」

「……ストーリーテラーのことを言ってるのか？」

来は忙しそうに現夢本に何かを書き込んでいるため、話半分といった感じだ。

「だって、体から電撃を出すんですよ。人工的に改造されてあんな体になっただけでしょうか？」

「あんな体か。あいつは人工的っつか、ストーリー的に改造されたんだ。つまらないドラマであるテコ入れって感じに」

「ストーリーを変えれば、体から電気が？ わけがわかりませんよ」

「そうか？ 人間に血液が流れているように、ストーリーが流れていると考えれば、なんら問題はない」

たしかに來のように考えれば、ストーリーを変更するだけで能力が手に入れられる。ならば 茉梨は難しい計算問題が解けたような顔をした。

「だったら、来さんもストーリーで電気が出せる体になれば……」

「それは無理だ」

彼は筆を止めた。

「ストーリーを変えるっていつでも段階があって、まるでRPGの能力のようにレベル1から5までが存在する。そのレベルによって文筆師が制御できるストーリーが決まっているんだ。俺のレベル3なら小規模の空間を自在に操れるとかね。体のストーリーを変えるのはその中でもトップクラス、レベル6の文筆師にしかできない」

……？ 茉梨は矛盾を見つけ、少々混乱した。

「異議あります。レベル5までしかないのに、6とかおかしいです。矛盾しています。これでは体のストーリーは変更できないんじゃないですか」

「そのとおりだ。文筆師では体のストーリーは変更できない。ではどうやって実現したのかというと」

「モチロン、文読師によつてワタクシはこのボディを得たのデース」
茉莉が振り返れば、そこにアノートは佇んでいた。

「逃げないでお話とは、けっこうな余裕じゃない」

「あんたじゃ逃げても無駄だからね。それにあんたほどの力があるのなら、俺達なんて一瞬でこの部屋ごと殺せるはずだが」

來は臆することなくアノートと対峙する。俺達を殺せない理由があるはず、と來は今までの攻撃、態度から予測した。アノートの電撃は自由自在で半径100メートルに入れば確実に殺されるとまで言われていた。しかし同じ部屋にいるのに、いまだ彼らは生きている。これはアノートが本気を出せない理由、もしくは殺されない理由があるから、彼らはこうして生きていると來は考えていた。

その読みは半分当たっていた。アノートはワザと手加減して彼らを生かしている。それは殺せないのではなく、殺していいのかという疑問からきていた。何かがある、その好奇心が彼らを殺すことに躊躇させていた。

「デザインア、ワタクシ少々変になっていたのかもしれない。だが、大丈夫。死が望みとあれば、ワタクシはいつだってプレゼントしてあげますのに」

アノートは空中に浮かせた拳を広げる。
「ボルドウウウウー！」

誰もが認める圧倒的力で、この空間を彼は支配する。

1・9 フランケンシュタイン（後書き）

うう、話が進んでいるようで、進んでないような……
この戦いはいつ終わるんだろうか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1275t/>

本読み少女と偽りのストーリー

2011年8月7日03時15分発行